

2. 大分県特定家畜伝染病防疫演習の実施と検証

宇佐家畜保健衛生所

○本多祥宏・加藤洋平・(病鑑)尾形長彦・(病鑑)泉修平・吉田秀幸

【はじめに】

平成16年2月の本県での高病原性鳥インフルエンザ（HPAI）の発生以降、特定家畜伝染病を対象とした県域の防疫演習を毎年行っている。平成23年2月の本県でのHPAI発生を受け、県内6振興局管内から各1農場を選定しておき、演習当日朝に演習対象となる1農場を発表し演習を行うという、より実践的な方法を昨年度から実施することとなった。本年度は、当家畜保健衛生所管内の東部振興局が選ばれ、防疫演習を行った。今回、演習後にアンケート調査を実施し、本演習の検証を行ったのでここに報告する。

【検証ポイント】

- 1 備蓄資材の輸送：家畜保健衛生所の備蓄防疫資材の運搬車両への積み込み。
- 2 現地総合対策本部の運営：TV会議システムの運用、県総合対策本部及び現地との情報連絡。
- 3 各作業場の運営：集会場、農場敷地外作業場、緊急消毒ポイントの設営及び運営。
- 4 その他：動員者の演習への取り組み意識及び感想等

【検証方法】

本病発生時に現地総合対策本部となり、第一次動員者となり各作業場の設営及び運営に携わる当該振興局職員をはじめ家畜保健衛生所、保健所、当該市職員を対象に、演習終了後アンケート調査を行い、アンケート結果と実際の作業時間を勘案し検証を実施。

【検証結果】

- 1 備蓄資材の輸送：備蓄資材を行き先別に色分けし保管しておくことにより、積卸しが的確にできた。資材を速やかに積み込むことが可能になり大幅な時間短縮が図られた。
- 2 現地総合対策本部の運営：テレビ会議システムにより現地情報の報告や本部からの指示が適切に行われ、また、現地からは逐次作業進捗状況の報告が入り情報管理ができた。
- 3 各作業場の運営：作業場の設営は各総括の指揮の下、順調に設営が行われた。演習という制約の中で実際の作業とは異なる部分もあったが、全体的な流れの把握ができた。
- 4 その他：事前の研修を行い、初動防疫に対する共通認識を持ち実地演習に望むことができた。アンケートでは多くの参加者が自分の役割を理解し演習に臨め、今回の演習が実際の発生時の自信につながったと回答した。

【まとめ及び考察】

今回の演習の検証の結果、備蓄資材の色分けや連絡体制の徹底により迅速かつ適切な運営が行われ時間短縮された。また、参加者の初動防疫作業に向けての意識が高められた。今後、さらに演習を有用なものにするため目的を明確にした演習計画「Plan」、計画に沿った演習の実施「Do」、演習の検証及び参加者の意見集約「Check」、演習方法の検討やガイドライン等の見直し「Act」のPDCAサイクルを繰り返していくことが重要だと考える。